２０２４．１．１４．主日礼拝説教
聖書： **マタイによる福音書 8 章 14～17 節**
『 彼はわたしたちの病いを負い 』

「多くの病人をいやす」という小標題が掲げられている本日の箇所は、量的にも質的にも読み応えがする訳でもなく、またさほど重要な内容を含んでいるようにも思えない記事ゆえに、じっくり取り組んで読み込もうなどという意気込みとは程遠い箇所でしょう。

この短い記事には三つの異なる部分が繋げられて完成しております。最初の部分は 14-15 節のごく簡単な奇跡物語です。ここでは、病人の説明・イエスの治癒行為・癒された人の証明という奇跡物語の基本的パターンが記されます。マタイはこの部分をマルコ 1;29-34 から得ています。第二の部分は、16 節のまとめの句です。これもマルコの物語を短縮して用いています。第三の部分は、17 節の旧約引用による奇跡物語の意義付けです。これはマルコにもルカ(4;38-41)にもなく、マタイが付加した部分です。

まず 14-15 節ではペトロのしゅうとめが登場します。つまり、ペトロは妻帯者だったのです。コリントの信徒の手紙Ⅰ 9;5 によれば、ペトロは後に妻を連れて各地を伝道しています。ごく初期のイエス教団ともいうべき初代教会の基本的な姿が垣間見える箇所です。ここではペトロも含め、他の弟子たちも登場しません。ただイエスとしゅうとめだけをマタイは記事にします。そして主語をイエスに据えて「行き・御覧になり・触れられる」というイエスの側からの「迫り」を強調します。マタイは物語に不必要なものを排除することによって、またしゅうとめが自分の力で立ち上がると述べることによって(マルコではイエスが立たせている)、誤解の多い奇跡物語に一定の方向性を強調しているのです。そして彼女はイエスのみをもてなします。つまり、救われた者とはその恵みを自分のために用いないで、自由になった体でイエスに仕えるべきだという考えに貫かれているのです。

17 節はイザヤ書 53;4 からの引用です。マルコではイエスが何者かであるのを公言するのは悪霊(マルコ 1;24)ですが、マタイは旧約聖書を用いるというこ

となのです。引用の理由はまさにここにあります。七十人訳は「この人はわたしたちの罪を担い、わたしたちのために苦しみを受けた」と訳しますが、ここでマタイはあえて直訳して、七十人訳聖書のような代償的苦難と贖罪の観念を用いてはいません。マタイの描くイエスはただ病いを担われるだけなのです。これは当時、巷に溢れ返っていた「病いとは罪に対する罰」という理解に対して、マタイは決してそうではないと宣言しているのです。

信仰とは確かに喜びを与えてくれはしますが、それが目的ではありません。それでは何のためかといえば、信仰とは人生の根底にある問題を明らかにするためのものなのです。

信仰とはわたしたちの持つ醜さを明らかにし、それから思いをそらさないようにすることをもって第一義とするものなのです。そういう意味で、信仰とは喜びよりは苦しみを与えてくれるものであるのです。そして、まさにその苦しさにおいて、人生の根底に触れている故の安定感を与えてくれるものなのです。信仰の与える喜びとは、この安定感の別名に他ならないのです。

マタイの伝えるイエス理解とは、この人生の根底にある病いや患いは罪に対する罰ではないというイエスの革新的な、そして暖かい人間理解なのです。ここに信仰があるのでしょう。